

りどころとして、十二年間、地域の活動の拠点として愛され親しまれ、利用されてきました。その間「ふれあい健康教室」「なんなん体操教室」「開明小交流事業」「いきいき健康ひろば」「各種手芸教室」「絵手紙教室」「健康づくり講座」や、ひろば理事会、民協、健康づくり推進委員会などの団体の会合場所として、また、関連するいろいろな事業が行われてきました。統計上では月に約六百人、年間では約八万七千人もの多くの皆様にひろばを利用していただきました。この度、市の福祉計画の整備事業の一環でこの愛着

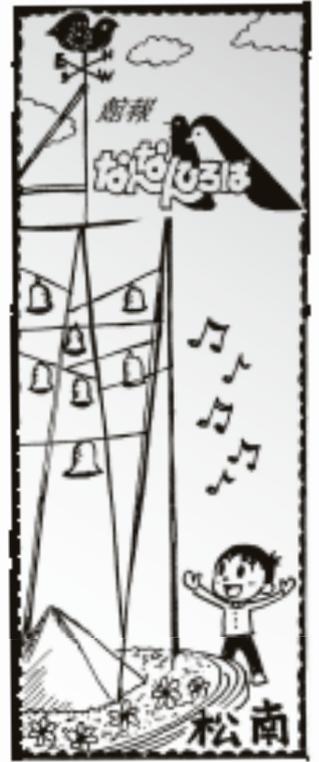


前松南地区福祉ひろばは、平成十五年二月二十日に開設して以来、松南地区の皆様への拠点として、市内三十五地区福祉ひろばの中でも特に多くの利用者で賑わっていた松南地区福祉ひろば。その大きな要因とも言える笑顔の素敵なコーディネーターの新田さんと井口さんは、「今までたくさんの方々にひろばを利用していただき、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも新しい場所で頑張りますので是非お出かけ下さい。お待ちしております。」と話していました。



松南地区福祉ひろば事業推進協では役員が集まって、昨年十二月二十五日に引越す備品を分別し、一月七日に各町会、

松南地区福祉ひろばが移転しました



各団体からの応援の人たちで力を合わせ、まず大きな備品を運び入れ、続いて、今まで愛着のあつた懐かしい備品をセットし、新しい場所での仕事がスタートしました。開所にあたり、川窪松南地区町会連合会長から、「新しい場所です松南地区福祉ひろばがスタートしました。松南地区の福祉の歴史に新たなページが加えられます。皆さんの一層のご協力をお願いいたします。」とのお祝いの言葉に続き、川上福祉ひろば事業推進協会からは「ひろばはなんぶくプラザに移転しました。前福祉ひろばでは長い間ありがとうございました。新たな福祉ひろばでも円滑な運営にあたりますので同様なご支援をお願いします。」と、感謝の気持ちと決意をそれぞれお話しいただきました。



新しい松南地区福祉ひろばが、地域の皆さんの福祉の活動の拠りどころとして、ますます発展させられることを望んでいます。皆さん、新しくなったひろばに是非一度お越しください。

(中田 清和)

冬の風物詩復活



十二月二十六日、なんなんひろば駐車場の一角にあるカリヨン塔に三年ぶりに約二千個の電球が温かく周辺を包むイルミネーションが灯りました。三年前までは、なんなんひろば玄関前にカリヨン塔があり、午前八時半、同十二時、午後五時にゆったりとした美しいメロデーが流れ、地域の特徴ある宝として、また、冬にはこの塔から四方に螺旋状に電飾された見事なイルミネーションが松南地区の冬の風物詩として親しまれ、遠方からの市民からも評判の良いものでした。このカリヨン塔はなんなんひろば周辺の市道整備に伴



い、ひろばが駐車場となったことから移転することとなりました。この間使用できなかったことや、電飾を設置していた松本東ライオンズクラブ(LC)が平成二十六年に解散したこともあり、カリヨンの音色も電飾も途絶えていただけに懐かしいものでした。再開には同LCから松南地区公民館に電飾一式寄付を受けたことを機に、松南地区町会連合会に諮ったところ快諾を得て実現の運びとなりました。今後も同連合会が松南地区の冬の大切な行事として引き継いでいくことが確認されています。電飾は一月二十日まで毎夜灯されました。点灯式には、なんなんひろばを練習拠点とする「松本音楽団」の記念演奏会が開かれ花を添えていただきました。

わがまちのお宝 〈芳野町会〉

「松本ガス(株)南松本工場 球形ホルダー・タンク」



昭和三十三年、松本市の南部地域に予定される大規模な公営住宅建設の計画を行政より要請を受けたが、「ガス供給」のため、芳野町に基地を設けた。

当初は、ガス製造の設備そのガスの貯蔵の任にあった。その後、昭和四十年代の中盤ともなると、南部に大企業・大型ショッピングセンターの計画に対応する貯蔵を大型化するため、「球形」の巨大タンクの設置となった。

当時、芳野町町会として「危険ではないか」「爆発したらどうなる?」と議論があったと聞く。しかし、

見慣れてしまい、いつしかシンボル化しました。逆にガス供給基地のおひざ元として、安心感を与えてくれています。

平成の時代となると、「都市ガスの高カロリー化への変換」で大変ご苦労された時代もあり、現在ではガス製造はされず、天然ガス化され、その中継貯蔵のための利用をさされて、「松本ガス南松本供給所」「松本ガス設備(株)」として存在するに至った様です。

松本の都市ガス供給の重要な中継点の機能をしていきます。松本には「渚・元町」にも同様の球形の造形物がありますが、いずれも大きく美しく見え、「たからもの」だなど思うのは私だけでしょうか。

(百瀬 壽)

ひと 長澤 幸子さん

お歳を重ねられても生き生きと自立して生活しておられる長澤幸子さんをご紹介します。と思います。長澤さんは大町市のご出身です。



終戦直後大町に設立した洋裁学校で、今に至るまで仕事としてやってこられた洋裁の基礎や技術を習得されました。

親には反対されたそうですが叔母の勧めがあり、昼は家事を手伝って夜間の部に通いました。洋裁を職業として仕事に就かれたのは五十歳になってからだそうです。それから八十一歳まで現役で働いて八十五歳になられた現在でも、丁寧な仕上げで信頼も厚く、また、温和なお人柄でもあることから、当時のお客様から寸法直しの依頼があるそうです。

一男一女を育て上げた今ではお一人での生活ですが、週に六日はスポーツジムに通われて、水泳は三百メートルを泳ぐそうです。また、地域の行事や講座には進んで参加され、趣味のパッチワークや小物作りにも余念がありません。



せん。

先日「携帯電話は便利だけど、相手の都合が見えないのが難点ね」というお話をしたら「メールは苦手でしない」とおっしゃっていました。何日もしないうちにメールが届いて驚きました。今では上達され、臨機応変に使い分けていらっしやいます。

お若い頃のお話も伺いました。今でいう山ガールだった時代は槍ヶ岳や白馬岳を始め、北アルプスの山々に登頂され、冬はスキーを楽しんだそうです。

「動けるうちは仕事もし、趣味もやり、楽しみも見つけて出かけた。家の中でポーターとしてやることは嫌い」とおっしゃる長澤さんは、とてもポジティブで行動的です。バイタリティーの原点は青春時代にあったのだと頷けます。

六十五歳からは高齢者と言われ、七十五歳になると後期高齢者に格上げ?されます。それは行政や医療での区分です。「精神年齢は自分次第」と長澤さんから教えていただいた気がします。これからお元気で過ごされるようお願いいたします。

(志賀 幸子)



親父が百歳の天寿を全うして、昨年十一月十四日亡くなった。預かってもらっていた特別養護老人ホーム主催の敬老の日に、内閣総理大臣、県知事、市長、施設長と四人の表彰状を戴いた。大正、昭和、平成と三つの時代を生き抜き、先の大戦では弾を二発も撃たれても生き残った。

戦後七十年と言われているが、終戦時は三十歳という計算となる。志願して軍人になった時の話や戦時中の話は、私が未だ小さい頃・またその話?というほどよく聞かされた。

終戦後、「公職追放令」のため、公職には就けず、職を転々とせざるを得なく、決して裕福な家庭とは言えなかった。

それでも夏休みには家族で遊びに行った。塩尻峠から諏訪湖までハイキングや諏訪湖丸の遊覧、聖高原などが思い出される。そして、町会においては部長、副町会長、町会長など、延べ二十七年の長きにわたり務めた。自分がその立場になつてみると、「親父、よくやってきたな」と思う。

(中田 清和)